

広がりのなかのカント哲学  
ーレッシング、ヘルダー、和辻哲郎ー

2022. 03. 05

笠原賢介

1. はじめにータイトルの説明：

「教えることは学ぶこと」、「われわれは教えることによって学ぶ (docendo discimus)」。

大学院演習：カント『判断力批判』。

学部演習：ニーチェ『ツァラトゥストラ』、『悲劇の誕生』、『悦ばしき知恵』。

超越論的哲学としてのニーチェ：〈考えること〉の可能性の条件を問う哲学。

イマヌエル・カント (1724-1804)：

『活力測定考』(1747)

『天界の一般自然史と理論』(1755)：カント＝ラプラスの星雲説。

『純粹理性批判』(1781)

『判断力批判』(1790)

批判期と批判期前の区分を硬直化させない。

バーク『美と崇高の観念の起源』(1757) →カント『美と崇高の感情に関する考察』(1764)  
→『判断力批判』(1790)。

レッシング (1729-81)、ヘルダー (1744-1803)、ヨーロッパ啓蒙の広がり。

和辻哲郎 (1889-1960)。

軸としての「構想力 (Einbildungskraft)」。

2. 浜田義文とエルンスト・カッシーラー：

浜田義文『カント倫理学の成立 イギリス道徳哲学及びルソー思想との関係』勁草書房、1981年。

イギリス道徳哲学：シャフツベリ、ハチスン、アダム・スミス。

エルンスト・カッシーラー (1874-1945)：

『啓蒙主義の哲学』(1932)：自然認識と自然観、認識論と心理学、宗教、歴史、法と国家、美。18世紀の英・独・仏の思想家を広く視野に収める。

哲学者、文学者、歴史家、神学者、科学者を分けず、相互関連の相のもとで見る。ドイツではライプニッツ（1646-1716）、レッシング、ヘルダー、ゲーテ（1749-1832）など。

カッシーラー『実体概念と関数概念』（1910）。

ヘルダー：言語や文化の多様性。ゲーテ：デカルトやニュートンとは異なった動的な自然観の発掘。有機体・生命の問題。→カッシーラー『象徴形式の哲学』（言語・神話・認識の現象学）（1923-29）へ。

### 3. カントとレッシング「美的理念」と『賢者ナータン』

「レッシング『賢者ナータン』再読」『思想』、2018年2月号。

#### 3-1. レッシングとは：

1729年生、カントより5才年下。1781年没。『純粋理性批判』出版の年。

『賢者ナータン』（1779）。死の二年前に書かれる。内容は、第三回十字軍（1187-92）の時のエルサレムを舞台にする劇。

ヴォルテール（1694-1778）の『寛容論』（1763）。

『賢者ナータン』とカントとの関係：カント『単なる理性の限界内の宗教』（1793）、『人倫の形而上学の基礎づけ』（1785）、『実践理性批判』（1788）。

『判断力批判』（1790）で述べられている「構想力」と「美的理念」。

#### 3-2. 『デカメロン』と『賢者ナータン』：

イタリア・ルネサンスの文学者ボッカチオ（1313-75）の『デカメロン』（1353）。

『デカメロン』の第一日・第三話：「ユダヤ人メルキセデクは三つの指輪の話をして、サラディンがたくらんだ大きな危難をのがれるという話」（高橋久訳）。〈三つの指輪の話〉。

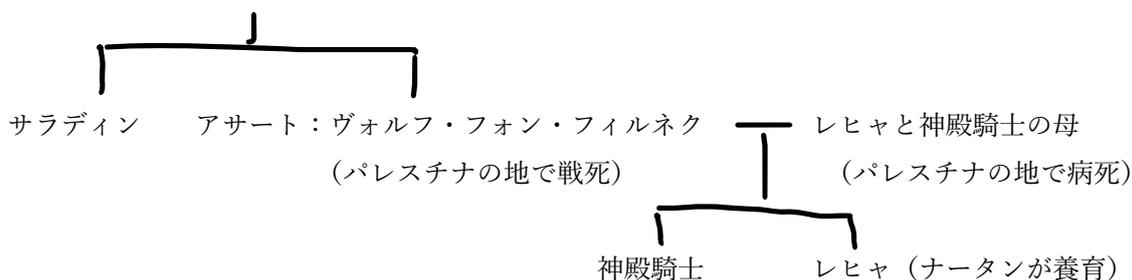
サラディン（1138-93）：十字軍と闘ってエルサレムを奪還したクルド人の王。

『賢者ナータン』：アレクサンドリアからエルサレムへ。時も限定していて、第三回十字軍（1187-92）の時代、1192年に和平協定が結ばれ束の間の平和が訪れている一日の出来事。

ユダヤ教徒のナータン、その娘のレヒャ、レヒャに恋をする十字軍の青年の神殿騎士、エルサレムを奪還して支配するイスラームの王サラディン。

〈三つの指輪の話〉：全5幕の真ん中、第3幕。ハンナ・アーレント（1906-1975）のレッシング論：「暗い時代の人間性 レッシングについての考察」（1960）：『賢者ナータン』は古代的な友愛（*philia*）の劇。

図 1 :



### 3-3. 「美的理念」と「構想力」:

「美的理念 (ästhetische Ideen)」:

「美的理念」は「多くのことを考えさせるきっかけとなる構想力の表象である。だが、この表象は、いかなる特定の観念、すなわち**概念**もそれに適合することができない。したがって、どのような言葉も完全にはそれに到達できず、また理解させることもできない、そのような構想力の表象である。」(『判断力批判』第 49 節、強調は原文)

「構想力」:「再生的構想力 (reproduktive Einbildungskraft)」と「産出的構想力 (produktive Einbildungskraft)」。

「構想力」:「直観の多様なものをひとつの**形象 (Bild)** へともたらす」能力(『純粹理性批判』 A120)。

### 3-4. 「反省的判断力」と「規定的判断力」:

『判断力批判』:「規定的判断力 (bestimmende Urteilskraft)」と「反省的判断力 (reflektierende Urteilskraft)」。

判断力一般は、特殊なもの (das Besondere) を普遍的なもののもとに含まれるものとして考える能力である。普遍的なもの(規則、原理、法則)が与えられているならば、判断力は特殊なものを普遍的なもののもとに包摂するのであり [...], **規定的**である。しかし、もし特殊なもののみが与えられていて、判断力がその特殊なものに対して普遍的なものを見つけ出さねばならないならば、判断力はたんに**反省的**である。(『判断力批判』「序論」IV)

\*アーレント (ベイナー編・浜田義文監訳)『カント政治哲学の講義』法政大学出版局、1987 年。

### 3-5. 「美的理念」としての『賢者ナータン』:

『賢者ナータン』: 劇の空間と寓話の交差。

#### 3-5-1. ボッカチオからレッシングへ—〈三つの指輪の話〉の変容:

「ほとんど見分けがつかない」

「秘められた力 (geheime Kraft)」。

「幾千年を経たのち (über tausend tausend Jahre)」。

1192 年の一日の出来事の劇。

「はるかな昔、東の方に一人の男が住んでおりました。」

アレクサンドリアからエルサレムへ。

メルキセデクからナータンへ。

ナータン: 『デカメロン』 第十日・第三話。

ナータンは、カッタイオ (Cattaio) という土地に住む富裕で気前の良い人物。館は西方から東方へ旅する者も東方から西方へ旅する者もどうしても通らなければならない街道の近く。

#### 3-5-2. 「ここにも神々はいるのでから遠慮なく入るがよい」:

ここにも神々はいるのでから、遠慮なく入るがよい! ゲッリウスより (Introite, nam et heic Dii sunt! APUD GELLIUM)。

ゲッリウス (125 頃-180 以降) の『アッティカの夜』(大西英文訳、京都大学学術出版会、2016 年)。

ヘラクレイトス (BC500 頃) の言葉。

16 世紀の古いバージョンの『アッティカの夜』の「序言」。

「博学は見識を教えはしない」: ディオゲネス・ラエルティオス (加来彰俊訳) 『ギリシア哲学者列伝』(下) 岩波文庫、1994 年。

「ここにも神々はいるのでから、遠慮なく入るがよい」: アリストテレス『動物部分論』。

それゆえ、あまり尊くない諸々の動物の探究を子供のように嫌がってはならない。なぜなら、自然本性的なものには、みな、何か驚嘆すべきもの (ti thaumaston) があるからで

ある。そして、実に、ヘラクレイトスはこう言われている。すなわち、彼に会うことを望む人たちが家のなかに入ったところ、かまどのある炊事場で暖をとっている彼を見て立ち止まったので、彼はその客人たちに声をかけたのだと——つまり、「ここにも神々はいるのであるから」と、恐れず入ってくるように彼は促したのであるから——。ちょうどこのように、すべてのものには自然本性的で善美なる何かがあるということを理解して、とまどうことなく動物のおのおのの種についての探究へとおもむく必要があるのだ。(アリストテレス (坂下浩司訳) 『動物部分論・動物運動論・動物進行論』 京都大学学術出版会、2005年、80頁・一部表記を変更)

ヘラクレイトスが暖を取っていた「かまどのある炊事場」についての坂下浩司氏の注：——「明らかに、訪ねてきた客人たちは、炊事場を、尊くなくて汚い (美しくない) 場所だと思っている。これが動物の世界を表わしている。また、炊事場では鳥や魚を捌いていたであろうから、解剖にも対応するであろう。」(前掲訳書、81頁)。

〈真理は貨幣ではない〉(『賢者ナータン』第3幕・第6場)。→ヘーゲル『精神現象学』「序文」。

### 3-6. 「美的理念」と「図式」:

カントの宗教論: 〈見えざる教会〉の理念。

カント倫理学: 他と交換不可能な 〈尊厳〉。

「美的理念 (ästhetische Ideen)」と「図式 (Schema)」。

『判断力批判』第29節: 倫理的なものの図像化の禁止。

美的理念は [...] 多くのことを考えさせるきっかけとなる (viel zu denken veranlaßt) 構想力の表象である。だが、この表象は、いかなる特定の観念 (Gedanke)、すなわち概念 (Begriff) もそれに適合することができない。したがって、どのような言葉 (keine Sprache) も完全にはそれに到達できず、また理解させることもできない、そのような構想力の表象である。(『判断力批判』第49節)

### 3-7. まとめ—レッシングとの広がりの中でのカント:

#### 4. 和辻哲郎と構想力の問題：

##### 4-1. 「室町時代の構想力」：

『日本芸術史研究 歌舞伎と操り浄瑠璃』（1955）。

歌舞伎の『恋女房染分手綱』の「重の井の子別れの段」。

近松門左衛門の『曾根崎心中』。

「民衆の構想力の底流」（坂部恵『和辻哲郎』岩波書店、1986年、4頁）。

##### 4-2. 「存在的」と「存在論的」：

「歴史的自覚の問題（断片）」『展望』1946年7月号。

ハイデガー『カントと形而上学の問題』（1929）：「感性」と「悟性」の共通の「根」としての「構想力」。

人間存在の歴史的風土的構造の問題は、かつて時間についてアウグスティヌスがいい近頃『有』の問題についてハイデガーがそれを繰り返し力説したように、**存在的には我々に極めて親近であるにもかかわらず、存在論的には極めて我々から遠い問題**なのである。人は通例、その生まれ育った人間社会の中で 因襲に従って生きて行く限り、この構造のただなかにありながらそれに気づかない。勿論それは自分の住む土地のほかに異った土地があり、自分の呼吸する時代のほかに異った時代があるということを知らないという意味ではない。彼はそれを考え、また一定の姿に於いて想像しさえもするであろう。しかも彼はその異なっていることを真面目に問題とせず、従って自分の営む生活の歴史的風土的な特性をも自覚していないのである。その結果、**異なった時代や国土を自分の時代や国土の型にはめて理解する**ということは極めて一般的に行われている事象である。[...] 例えば我国の室町時代の物語は、神功皇后の新羅征伐を物語るに際して、皇后が唐綾おどしの鎧に身を装われたと記している。古代の武装をも自分たちの時代の武装にあてはめて想像したのである。（和辻「歴史的自覚の問題（断片）」『展望』1946年7月号、5-6頁）

##### 4-3. 『曾根崎心中』と「神功皇后」表象：

#### 5. まとめのまとめ—〈広がり〉のなかの哲学へ：

和辻哲郎『風土』：「牧場」、「砂漠」、「モンスーン」。

カッシーラー『啓蒙主義の哲学』（1932）。